

Cross Talk Business Art

10周年を記念して、海外と芸術の奨学生が初めて交流する座談会を開催。

自己紹介で大いに盛り上がった後、ビジネス×アートの観点と、これから10年について語ってもらいました。

—まずはビジネス×アートの観点から、お互いに聞いてみたいことはありますか？

高岡：最近自動で音楽が作れたり絵が描けたりするのが結構出てきてて、そのクオリティもすごく上がっている気がするんですけど、アーティストの方はどう考えていますか？

佐藤：僕はAIをそんなに脅威とは思っていないんですよね。あれって既に世に出回っている莫大な情報量をインプットして、割とみんな心地よいと思うものに出力しているだけだから、既存のもの寄せ集めでは新しい発想はAIからはできないかなと。でも、AIで生まれる発想に助けてもらうとか、省エネできる部分もあるから、脅威というか、うまく利用してアーティスト側もやっていけばいいのかなって思っています。

条原：私も佐藤さんと同じで、AIとどう付き合っていくかが大切な思います。実は自分もAIを使ってみて、こんなに簡単にパッと画像ができるんだと感じたけど、実際自分がかなり時間をかけて制作している作品と比べると、出来上がった物の実感の違いの大きさがありました。ただ、AIのクオリティが上がってきた時に、自分はどう刺激を受けるのかって考え出すかもしれないです。あと、イノベーションみたいなものが生まれづらいかなと思っています。

桜井：アートって見た目以上に背景とかコンセプトとかを楽しむ側面もあって、鑑賞側の視点としてその部分はAIにないかなと思います。あと物質的なものも全然違って、AIってデジタルじゃないですか。絵画というものは、絵の具を時間かけて載せているんですね。物質が載ってるというのは、実物を観て、絵の具の質感だったり透明性だったりが分かることで、そこにやっぱり、時間とか思想とか哲学みたいなものが載ってるというか。だから僕自身も全く脅威ではなく、むしろ加速しても全然ありがたいくらい。現場制作なんてすごいニッチというか、絶滅危惧種みたいなものなんですけど、だからこそAIが加速すればこっち側の強度が増すと思っています。

—逆にビジネス視点でAIがこれから

どんどん進んでいくことはどうですか？

高岡：ビジネスは分かりやすいですよね。そういうのに対してお金を出す人がいればいいわけ、人が描いたものよりAIが描いたものに人がお金を出したがるとなれば、それはそっちの方がビジネス的にはいいから。

そういうもんなんじゃないかな。ただ、おっしゃる通り、お金を出されたものがイコール、本質的に良いという話ではないと思って。ビジネス的にはいっぱいチャンスがある、というのは間違いかなと思いますね。コロナを経て体験の価値が上がってきている。それはそれでビジネスとしては、逆にすごく価値だなって思ってます。

前田：ビジネスや学問と芸術の大きな違いって、ビジネスって別に僕がいなくても社会は回るし、スティーブ・ジョブズがいなくてもああいう製品は出てきたし、僕らができるのは歯車の一つでしかないというのに対して、芸術家の方が羨ましいと思うのは、その人がいなければその作品は出てこない、その唯一無二性みたいなものは大きな違いかな。この考え方じゃくちゃしゃくり来て、でもなんか全否定されたような気がして(笑)。

市川：私あまりそう思わないかも…同じような業態・サービスはあっても同じものにはならないと思うし、むしろAIが発展していく中で、機械でも叶えるものは人間がやらなくともいいわけだから、ビジネスの世界でもアーティスト的に何かビジネスを生み出すみたいなことが求められてくるし、今後はアートとビジネスが近くなっていく。生み出したものはビジネスであれアート作品であれ、アーティストの作品みたいな感じで扱われていくべきなんじゃないかな。だから前田さんはアーティストです、これから(笑)

前田：確かにAIに唯一代替されないものって、ロジカル性じゃなくてシンパシー＝感情の部分というのは本当にそう。こういう世の中にしたい、ビジネスを作りたいという思いを持って人を巻き込むところは代替されないんだろう。

桜井：アートって、人に感動を与えること、変化を与えることはできるんですけど、歴史と共にあるというか。ビジネスって、何か作って社会を動かしていく、そういう意味でアートとは全然違う側面すごい価値があるもので、創造性のあるものだなって思ってるので、視点によってはビジネスもアーティストだと思います。社会をモチーフにしているというか…

—ここからは、これから10年について、

ご自身または神山財団について聞かせてください。

市川：そうですね。これまでの10年は結構自分軸で判断してきたけど、子供が生まれて、これからの10年は家族単位で全部を決めていくのかな。

Next 10 years of the Kamiyama

もともと神山財団の海外留学生って「自分のキャリアを促進させるんだ！」という想いで集まってきたんですけど、ライフステージが変わるために、必ずしもその当時と同じスピード感やペクトルで、とはいえないかなと。最近のテーマは「人生にもいろんな季節がある」という言葉で。

条原：1年先のことが結構わからない状況なので、私自身、家族がいても、煩わしい関わりがあっても、収入がゼロになっても、描くことだけは続けていければいいな。

佐藤：神山財団の芸術支援は、全国の同じ絵画をやっている学生が時々勉強会とかで集まれることが良いなと思っていて、それはすごく大きいことだと思うんですよね。芸術ってどうしても徒弟制みたいなところもあって固まりがちで、みんな恥ずかしがり屋だし、僕も人見知りなんですけど、でもやっぱり交流を積み重ねていくと、すごいネットワークや新しい動きになる。現役の奨学生が財団のつながりでグループ展をやったりしていて、そういう動きもすごい良いなあと思っています。海外の方々とも、もう少し何かできることとか、おこがましいかもしれないんですけど、刺激を受け合えることがあればいいな、と思っています。

高岡：実は今回、芸術生から「話したかった」という話を初めて聞いて、ちょっと嬉しいというか。神山にいる人たちは「何で自分はこれをやっているんだ」とかすごく考える人たちが多いので、そういう点で、意外と共通点あるなあって。10年あつという間ですからね、「交流していく」という単純なテーマだけでもこの10年、結構いいんじゃないかな。

前田：ここ10年間の人々の価値観の変化がものすごい勢いで進んでいて、いい生活をするためじゃなく、「こういうものをやりたいから」というところに、人々の価値観はだんだん集約されていくんじゃないかな。やっぱり神山財団で一人ひとりが「自分は何をやりたいのか」ということを話し合える場はすごい貴重で、恐らくビジネス側の人も、芸術的なセンスや自己表現みたいな方向に近寄ってきて、10年後、実はビジネスでやる自己表現と、芸術でやる自己表現が近くなっている可能性もあるなって思う。作品とかビジネスモデルとか、自分の想いを話し合う場ができた面白いかもしれないですね。

桜井：10年後、実感としては全然わからないんですけど、技術が便利に進

化していると思うんですよね。で、ChatGPTとかAIとともにそうですが、すごい自動化みたいなことが進んでいくのかな。その反動で、自然派みたいな、例えば車を運転することに価値が生まれる、お金を払ってでも車を運転して帰る、みたいな欲求とともに生まれそうです。キャンプがすごいブームになってるとか、手間暇かけることに価値が生まれてくるんだろうな、という変化を勝手に想像していました。

佐藤：僕は版画をやっていたから実感あるんですけど、今版画を作ってる人のメディアって、昔は普通に印刷技術だった訳ですよね。末だに1600年代のレンブラントと同じように、ある意味遅れているメディアを使いつけて、それはそれでなんか、別の価値が生まれている、みたいなこととか。

高岡：むしろ便利さの価値がどんどん無くなっているかもしれない。

—進んでいくけど原始的になっていく、新価値が生まれてくるみたいな。
根源的な欲求みたいなものがあるかもしれません。

前田：心理学的にはそういう方が幸せを感じやすいというのがあって。発展する上で、比較して、競争する、でも発展しきっちゃうと、あとは自己表現みたいな話とか、ちょっとみんなの役に立てた、みたいな話以外に喜びを感じる要素が無くなってくる。芸術がいいなって思うのは、まさに自分が表現して、それがみんなの目に留まつたら、人を巻き込んで感動を与えられる作品を作っているところで、ビジネス側の人が最終的に行き着くようなところを、もう既にやってるんだなという気がします。

今回の座談会は、最初どこまで盛り上がるだろうと心配していましたが、皆さんと同じ思いでお話できたのは、神山財団というベースの上に、白いキャンバスに絵を描ける人たちが集まって、そこに率直な皆さんの思いと努力があって、それに共感するものがあるからだと感じました。紙面の都合上、ほんの一部しか掲載できませんが、他にも芸術の道に進むルートの話やどんな絵画が好きかという話、海外・芸術合同で絵を描くワークショップをやってみたい、など交流の幅が広がる意見もいただきました。ぜひ実現したいと思います。次回も間違いなく盛り上がりそうですね！

一同：ありがとうございました！

海外2期生 高岡 淳二さん
Kellogg School of Management,
MMM - Joint MBA/MS in Design Innovation
2016年卒業

海外3期生 市川 晃子さん
Stanford Graduate School of Business,
Joint MBA/MA in Education
2017年卒業

海外3期生 前田 拓さん
Harvard Business School, MBA
2017年卒業

芸術1期生 条原 愛さん
多摩美術大学 日本書
2015年卒業

芸術2期生 佐藤 拓実さん
東京造形大学 絵画
2017年卒業

芸術7期生 桜井 旭さん
金沢美術工芸大学 油画
2022年卒業

